

浮世絵と描かれた江東⑤

江東区ゆかりの浮世絵師

江東区深川江戸資料館

現在開催中の企画展「こうとう浮世絵づくし」(~10月31日まで)では、江東区に關係する浮世絵を中心に展示を行っています。本号では、その中から江東区にゆかりのある浮世絵師を紹介します。

1. 葛飾北斎 (1760 ~ 1849)

葛飾北斎は宝暦 10 年 (1760) に江戸本所割下水付近 (現在の墨田区亀沢) に生まれました。幼少期から絵を描くことが好きで、19 歳頃に当時の役者絵の第一人者だった葛飾春章入門、勝川春朗の名前を与えられ、わずか 1 年足らず



木村黙老『戯作者考補遺』
国本出版社 昭和 10 年 (1935)
国立国会図書館蔵

で浮世絵師としてデビューします。35 歳頃に勝川派を去った後は諸派の画風を学び、錦絵や肉筆画をはじめ、黄表紙(*)等の版本の挿絵など、数多くの作品を残しました。

北斎の代表作であり、浮世絵史に残る名作「富嶽三十六景」は北斎が 70 歳を超えてから描かれたもので、その体力と気力、そして年々上がっていく画力は当時の絵師たちのなかでも群を抜いています。晩年に名乗った「画狂老人 卅」という号からは、絵に対する北斎の「執念」ともいえる想いがよく表れています。

北斎は亡くなるまでの間に 30 回改名し、さらに 90 回以上も転居したという少し風変わりな人物でした。そんな北斎が晩年に住んでいたと言われている

のが、現在の深川万年橋辺りです。

*黄表紙…草双紙とも表す。娯楽性の高い読み物を指しその多くは、人々が知っている話題や注目されている話題を奇抜な設定等を加えて装飾するなど、面白みを出す手法で作られた。政治がらみの内容も多いことからたびたび幕府の強い弾圧を受け、絶版となる本も珍しくなかった。

2. 北尾政演 (山東京伝) (1761 ~ 1816)

北尾政演は宝暦 11 年 (1761) に深川木場の質屋を営む家に生まれ、15 歳の頃に浮世絵師の北尾重政入門、絵師として黄表紙の挿絵を中心に美人画や役者絵などを手がけました。政演の描いた作品の中で役者絵は現在 10 点ほど確認されており、黄表紙評判記『菊寿草』の「絵師之部」に重政や鳥居清長に次いで名を連ねるほどの実力を持っていたことが分かっています。

一方、政演は絵だけではなく文才にも優れ、「山東京伝」という戯作の号で黄表紙や洒落本、合巻、読本など、様々なジャンルの作品を残し活動の幅を広げていました。しかし、戯作者としての地位を不動のものとしていたさ中、寛政の改革による出版統制令により 2 度も処罰の対象となり、特に、2 回目には手鎖 50 日の刑に処されるなど重い罰を受けます。これを機に政演は洒落本の執筆を断ち、さらに、浮世絵師としての活動も停止、その後は読本などの文筆業を中心に活動を続けることとなります。

3. 歌川国貞 (三代 歌川豊国) (1786 ~ 1864)

天明 6 年 (1786) に生まれた国貞は、初代豊国に師事して国貞を名乗り、のちに豊国の名前を継ぎます。役者絵を中心に美人画や版本の挿絵など多くの作品を残し、幕末の浮世絵界をリードした人物です。

国貞が所属していた歌川派は寛政期の終わり頃に大きく飛躍した絵師の流派です。初代豊国は写実的



歌川国周『豊国院貞画倦大居士』元治元年（1864）
江東区教育委員会蔵

な人体描写と役者のポーズの巧みさを得意としており、その特徴は国貞にも受け継がれています。初代豊国は、15、6歳で入門した国貞の類まれなる才能を大絶賛したと言います。

生涯を通しての国貞の作品数は全浮世絵師の中でも最大量におよび、役者絵のほか、美人画や版本の挿絵、源氏絵などの分野でも多くの素晴らしい作品を残しています。

生涯を通しての国貞の作品数は全浮世絵師の中でも最大量におよび、役者絵のほか、美人画や版本の挿絵、源氏絵などの分野でも多くの素晴らしい作品を残しています。

いちゆうさい げつぱろう きんらいしゃ とうじゆえん か ちようろう
一雄齋、月波楼、琴雷舎、桃樹園、香蝶楼など、多くの画号を使っていた国貞が特に好んで使っていた号に「五渡亭」があります。これは、国貞の父、角田肖兵衛が本所五ツ目の渡船の株を持っていたことから、蜀山人(*)がこの号を贈ったことに由来しています。国貞はのちに亀戸天神社の門前に住んだため「亀戸豊国」とも呼ばれ、亡くなったあとは亀戸の光明寺に葬られました。

*蜀山人(1749～1823)…大田南畝。江戸中期から、狂歌師や戯作者、また学者として多岐にわたり活躍していた文化人。



光明寺（江東区亀戸3-42-1）

4. 二代 歌川国輝（1830～1874）

歌川国輝は天保元年（1830）頃、深川御蔵前町に生まれました。初代国貞（三代豊国）の門人で、江戸時代末期から明治時代初めにかけて活動し、風刺画や風景画などを手掛け、他にも相撲絵や開花絵、鉄道絵などで活躍した人物です。さらに、文部省発行の教育画なども手掛けました。明治7年（1874）に亡くなり、宝蓮寺に墓があります。



宝蓮寺（江東区亀戸4-35-12）

5. 伊東深水（1898～1972）

伊東深水は明治31年（1898）に深川西森下町の深川神明宮門前で生まれました。本深川東大工町（白河）にあった東京印刷株式会社に勤務し、ここで画才が認められ、日本画家の鏑木清方かぶらぎきよかたに入門しました。深水の画号は深川の水にちなむもので、清方がつけました。深水が木版画と出会ったのは、清方のもとで挿絵画家の仕事を任された頃のことでした。深水の作品を見た渡辺庄三郎(*)が「ぜひ版画にしたい」と願い出たことからでした。深水は川瀬巴水かわせ ばすい(*)らと新版画運動に参加し、木版画界に大きな足跡を残すとともに、浮世絵美人画の伝統を現代に受け継いだ最後の一人と言われています。

*川瀬巴水(1883～1957)…大正から昭和にかけて、深水とほぼ同じ時代に活躍した画家。写生旅行をしながら多くの叙情あふれる作品を描き、「昭和の広重」と称された。
*渡辺庄三郎(1885～1962)…画商、版元。深水や巴水たちに原画を依頼し、新版画を制作した。

【主な参考文献】

国際浮世絵学会編『浮世絵大辞典』（株式会社東京堂出版／2008年）ほか